

対馬文化財通信

第4号



対馬市文化財保護審議会編

〔表紙題字〕 梅野正博

〔表紙写真〕 巖原町田淵の旧武家屋敷通りの門と石垣
(平成23年1月18日 小松勝助撮影)

対馬文化財通信

第4号

対馬市文化財保護審議会編

目 次

— 卷頭言 —

経典類の悉皆調査	1
<input type="checkbox"/> 慶長朝鮮通信使朝鮮海峡の航海	2
<input type="checkbox"/> 豊砲台の砲身は「赤城」の二番砲	3
<input type="checkbox"/> 地域と「舞い」	4
<input type="checkbox"/> トキ、コウノトリ、そしてツシマヤマネコ	5
<input type="checkbox"/> 金田城探訪会に参加して	6
<input type="checkbox"/> 釜山にあった日本人居留地	6

— 卷頭言 —

經典類の悉皆調査

対馬島内に多くの經典類が伝来していることが知られるようになったのは、さほど古いことではありません。すなわち、昭和二十五年に行なわれた九学会の調査（考古学、人類学、歴史学など九つの学会の連合による総合調査）の折も經典類は調査の対象外でした。

小生がまだ大学に在学中、当時長崎市立博物館の学芸員で、長崎県文化財専門員をしておられた越中哲也先生が、杵岐の安国寺の般若若経が「初期高麗版」であるとの報告を長崎新聞の学芸欄に書かれたことがあります。

昭和三十九年四月、豊玉村の塩浜小に勤務するようになった小生は、上対馬町西泊の西福寺に般若若経があることを知り、翌四十年の夏休みに見せてもらいに行きました。六箱を本堂に運びひとりで巻次を確認、奥書を探す作業がずいぶん時間がかかることがわかった本堀和尚夫妻が、塩浜から単車で行っていた小生に泊まって調査するようにすすめられたのをいいことに好意にあまえ五、六日宿泊させてもらって調べました。その結果お経は元版であること、宗貞茂の奥書があること、巻第五八七が一巻だけ欠けてはいるが、保存は良好であることなどが判明しました。昭和十八年、中島功による豆酸金剛院般若若経の調査を除けば、戦後対馬における經典の調査

はこれが初めてではなかったかと思えます。

つぎに經典の調査をしたのは、四年後の昭和四十四年一月永留久惠先生、主藤寿、本石正久氏らのご高配により、豆酸観音堂所蔵の大蔵経の調査をさせていただきました。九百冊余におよぶ大量な經典であることと、専門家の指導を受けることなく調査にとりかかったことなどで、とったタイトル（経名）の整理ができず順不同のままの仮目録を印刷せざるをえませんでした。あとになって、考古学者で九州大学を定年退官された鏡山猛先生がご尽力されて目録を整理して下さいました。

三番目は、平成二十三年三月十八日付で国指定重文の答申がなされた、上対馬町琴の長松寺の高麗版大般若経です。昭和五十六年、町誌編纂調査の過程で見つかったこのお経は初雕本であることが判明、さらに本経は前記の杵岐安国寺本と姉妹版であることもわかり、両者を比較研究した詳細な高麗版大般若経の目録を作ることができました。

市文化財課は、平成二十年度から島内にある經典類の悉皆調査を計画、今も調査は継続中ですが、現在までに朝鮮版、中国版、日本版、写本を含めて十九種のお経があることがわかりました。全貌が明らかになるのも、そう遠くないと思っています。

（小松勝助）

慶長朝鮮通信使朝鮮海峡の航海

—「海槎録」に描かれた海峡横断—

対馬藩国書を偽造 文禄・慶長の二度に亘るいわれなき朝鮮侵略(朝鮮史「壬申・丁酉倭乱」は、日朝双方に大きな禍根を残しました。朝鮮にしてみれば、日本は「不倶戴天の敵」となり、その憎しみは岩をもうがつほどでした。

だが、「何としても朝鮮との交渉を図らなければならない」という対馬の情念は、ついに実を結んだのです。対馬藩は、国交回復のための、朝鮮通信使来日の要請へと動きまわります。なんとしても国交回復をしてほしい対馬藩は、苦渋の決断をします。あるうことか「家康国書」を偽造して朝鮮王府に送ったのです。

海峡の航海 かくして対馬藩の謀略は成功し慶長十二(一六〇七)年二月、朝鮮通信使(回答兼刷還使)が来日します。四六七名の使節一行にとって風濤

の海峡は、苦難の航海でした。使行録「海槎録」(副使慶運著)にその航海が記されています。

二月二十九日(晴)

丑の頃に海岸が上がって、海神の祭祀を行う。夜明けに李士和・金子定が水使、僉使とともに陸路から来てお別れをする。三使臣が一つの船に同乗した。

辰の刻の初めに帆を揚げたが、風勢は順調で帆の速度に支障はなかった。ようやく海の中ほどまで来ると、東風が大いに起こり、向かい風が船を打ち、巨浪が天にも達するので、水夫たちが氣勢をなくし、船が出没して傾き、上がるときは天に登るがごとく、下がるときは地底に入るごとくで、飛濤は雪を噴き出し、激しい波は雨のようであった。

た。対馬島に向かおうとする

ることができた(後略)

と、風波が打ちつけ釜山に帰ろうとすると海路は既に遠く、進退兩難に陥り、どうすることもできなかつた。水夫たちが互いに噂話を撒き散らすので、船中がざわついて危ぶみ恐れて、寸刻の間に事態がどうなるのか分からなかつた。

船の修理 使節はその後、西泊浦、船越浦に停泊して三月三日府中に到着した。泉浦に到着してから三日後、三月三日のことでした。使節が到着するや藩主宗義智は破損した使船を見て、

幸いに聖上の恩沢が遠くまで及んだおかげで、かろうじて対馬島の泉浦に着き、諸船も順次到着した。日は既に暮れた。常時往来する船は、完尼之浦(鰐浦)に泊まるのが通例であり、したがって対馬島の接待は皆そこで行っているが、風勢が不順ですぐに行くことができず、やっとこの浦に着いたのである。(中略)乗っていた船の底に隙間ができて、水が泉のように湧き出て、ぼろ布で防ぎきれず、一刻の間に船の中の水が肩を越した。あわただしく水を汲み出して、幸い沈没は免れ

…島主は、一行が乗ってきた船が皆頑丈でない、と言つて改装することを願ひ出たのでこれを許した(「海槎録」)。とみえ、使船の状態を憂慮しています。

船の修理は始まり使節一行は、その三日後とさらに四日後も、船の修理状況を視察しています。そして、三月十四日に、

船の修理が終わり、極めて頑丈になつた。とみえます(「海槎録」)。

その後、使節は無事に航海を続け、江戸まで登つた使節一行は、西泊・鰐浦・佐須奈を経て、大任を果たして七月三日、釜山に無事帰着しました。十二回に及ぶ朝鮮通信使の始まりでした。

(齋藤弘征)

豊砲台の砲身は

「赤城」の二番砲

—そこに至る秘話—

朝鮮海峡に面した上対馬町の久ノ下崎の山頂に、豊砲台と称する旧要塞あとがある。昭和四年に着工し、同九年に完成した。

北の砦として朝鮮海峡をならむこの砲台は、四五口径四〇センチ加農砲の巨砲で、射界は三五キロで海峡の中間点を越えるものであったという。水圧式でボタンひとつで上下左右に動く当時としては最新式の設備を誇っていた。この砲台には、百五十人もの砲兵隊員が常駐していたが、今後の世界大戦には一度も使用されなかった。

さて、この砲身であるが、これまで世界軍縮会議によって沈められた戦艦「土佐」とか「長門」の主砲とかの諸説があり、文献によつてまちまちであった。

当時の上対馬町役場では、観光案内板やパンフレット等にはつき

りした戦艦名を書き必要に迫られ、平成三年に防衛庁防衛研究所に防衛資料

を送り調査依頼をした。その後、同年十月に同研究所の戦史部から回答があった。

私も当時、役場吏員であったので、後日その回答書をコピーさせてもらい、コピーは現在私の手許に残っている。—それを改めて紐解いてみたい(原文のまま)。

前略、先日は豊砲台の資料等ありがとうございました。豊砲台の砲について、土佐説、長門説があります。私の調べた結果、赤城の二番砲であることがはっきりしました。

関係史料は次のとおりです。
①『砲兵沿革史』(草野二郎氏)に赤城とあります。

②『密大日記』の昭和六年第四冊に機関番号七四九一〜七四九三(百馬力ガソリン始動石油発動機)、一四四〜一四六(七十水

馬力水圧唧筒)は、赤城二番砲とあります。『密大日記』の昭和九年第二冊に、対馬要塞配置四五口径四〇砲の図面目録には、前記と同じ機関番号となっている。

以上のことから、赤城二番砲であることが判明します。

戦史部所員 原 剛

このように手書きで文面が添えられており、戦時は機密書類であった陸軍省の昭和六年と昭和九年の『密大日記』の関係分コピーが同封してあり、また防衛研究所図書館所蔵の『砲兵沿革史』第五巻(昭和四六年発行)の「海岸要塞備砲作業回想録」(草野二郎著)のコピーも添えられていた。

この陸軍省の『密大日記』には、昭和五年十二月に呉の海軍工廠で赤城の二番砲の改修が行われる旨の通達があり、昭和九年一月にその兵器を対馬要塞司令部へ配布予定の旨通達があつている。また草野二郎氏の「海岸要塞備砲作業回想録」には、対馬南島の竜ノ崎砲

台に据えられたのは「摂津」の三〇センチ加砲二基と記されている。なお草野氏本人は、竜ノ崎第二砲塔備砲及び八八式海岸射撃の現場主任であつたと述べられている。

このように専門機関である防衛研究所からの回答を受け、それ以降、上対馬町(現在は対馬市)では、豊砲台の砲身は巡洋戦艦「赤城」の主砲であると明記するに至つたのである。

(参考)「赤城」

旧日本海軍の航空母艦。一九四一年十二月八日の真珠湾攻撃から一九四二年六月ミッドウェー海戦で沈没するまで日本主力機動部隊の旗艦であつた。一九二七年に旧海軍の航空母艦の第二艦として完成。もとは巡洋戦艦赤城として起工されたが、ワシントン条約による戦艦廃棄のために空母として改造された。完成時は三層の飛行甲板をもつていたが、一九三三年には一枚甲板に改装された。排水量三万六五〇〇トン、速力三ノット。飛行機搭載数は常用機六六機。補用機二五機。

(ブリタニカ『百科事典』による)
(洲河真紀)

地域と「舞い」

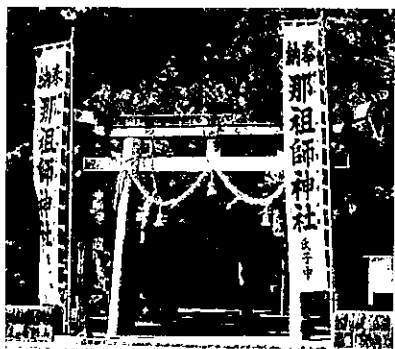
六百年の祝典が昭和十五年（一九四〇年）に行われ、

その奉祝会が制定

したのが、この神前神楽舞（浦安の舞）です。

平成二十二年十一月二十三日（火）、勤労感謝の祝日、上対馬町豊地区にある「那祖師神社」ではいつものように秋の大祭が行われました。そこで、豊地区に住む女子四人による「浦安の舞」が奉納されました。二人は高校生、二人は中学生です。

浦安の舞は、巫女の舞う神前神楽舞で、もと巫女の神懸かりの舞が奉納舞にかわつたものといわれ、現在も多くの神社で奉納されています。浦安とは、「心のやすらか」という意味で、平和を祈る心の舞です。皇紀二千



那祖師神社

巫女に扮する地元四女子は、「扇の舞」（この舞は扇の要を中心に豊かに開けゆく世界を表現し、そうして人々の繁栄を祈る心の舞）と、「鈴の舞」（この舞は安泰の舞と言われ、三種の神器をかたどつた鈴を手に舞う舞で、鈴の清らかな音色が万物を清く美しい響きが神と人の心にふれあい、やすらぎ、喜びを意味している）を厳かに舞い奉納しました。

豊の那祖師神社（大明神）は、旧藩政時代国主により建立されたもので、この神社内には島大國魂神社遙拝所があつたようですが、今はこの那祖師神社と島大國魂神社は合祀された形になつてゐるようです（『上対馬町誌』）。現在の祭礼はこの島大國魂神社、那祖師神社、若宮神社（豊く泉間北東のナンガ浦にあ



浦安の舞

る）の三社を合わせた形で、那祖師神社で行われています。以前は、旧六月三日の祭礼で中学生による舞が行われていたようですが、今はこの大祭（新嘗祭）で、女子による舞が行われています。かつて（昭和四十年代まで？）は、出店が軒を連ね、演芸大会も併せて行われるなど、古き対馬の神社の大祭であつたと思われれます。

現在、上対馬ではこのような巫女による舞が行われている神社は、隣の鰐浦、そして豊崎の計三方所しかありません。

伝統を語りついでいくことは大変なことです。人（組織、指導者、舞う人）、もの（道具、

施設、資金）そして何より心（誇り、感動、情熱）の、どれもが必要で、それが欠けると途絶えていきます。この行事は、古くからの伝統で神事であつたものですが、ここ豊地区では今でもその伝統を守り受け継ぐ人、もの、心があるということです。

町の活性化のためのイベントとしてその内容が昔とは変化をしてくているかもしれせん。

しかし、子どもたちが実際に体験をして「舞う」。地域に伝わる伝統を守り受け継いでいこうとする大人たちに接することは少なからずも郷土の伝統について関心を持ち、そのことが対馬の伝統のすばらしさに積極的に関わり、伝えていこうとする態度となつていく。私たち文化財保護に携わるものにとつて、何か大切なことをあらためて教えられる気がします。

そして、ここで舞を奉納した中学生2人は、この三月で廃校となる豊中学校の生徒として最後の巫女であることも付記しておきたいと思ひます。（宮脇好和）

トキ、「コウノトリ」、 そしてツシマヤマメコ

— それぞれの野生復帰 —

十月十日の朝死

に、ここに日本
産トキは絶滅し
たのでした。

一九九八年（平成一〇）、中国の江沢民国家首席が中国産トキのつがいを日本に贈呈することを表明、翌年一月三十日、「友友」（ヨウヨウ、オス）と「洋洋」（ヤンヤン、メス）は日本に到着しました。日中友好のシンボルとして贈られたこの二羽の国際保護鳥は、新潟県佐渡のトキ保護センターで飼育されていましたがヤンヤンが産んだ卵がふ化したのです。平成十一年五月二十一日午後三時半ごろのことでした（「優優」ユウユウと命名、オス）。日本におけるトキの人工繁殖の開始以来初めての快挙に新聞、テレビなどは大きく報道しました。

当時大調小学校に勤務していた小生は、翌月六月一日（火）の児童集会で、第一面に大きなトキのヒナのカラー写真入り八段ぬきで報じた某新聞を片手にそれより少し前にテレビ番組で中国の野生のトキが、山奥のせまい田んぼで作業をしている農家の人のそばで、さりげなくエサをついばんでいる様子を見て感激した話を交えながらトキの話をしました。このような中国の野生のトキの風景は、初夏学校の行き帰りに水田で近くの間など気にもとめないで、ゆつたりとエサをさがしているアマサギなどを見ている子どもたちにも容易に理解できました。

ていた中国科学院が陝西省洋県の姚家溝と金家河で野生のトキ七羽を発見したのです。
トキ（朱鷲、鴝）はコウノトリ科の鳥で、十九世紀までは対馬をふくめて東アジアに広く分布していて、決してめずらしい鳥ではありませんでした。
今からおよそ二百七十年まえ日本列島にどのような農作物が作られ、どのような動物がいてどのような植物が生育しているかについて、詳細な生態調査が行なわれたことがありました。
この大事業を企画、指揮したのは幕府の本草学者丹羽正伯でした。この調査で全国から集められた報告書『何々国産物帳』はゆうに千冊にもなると考えられますが、そのなかの対馬分「対州産物帳」に、トキは、「とう鳥」（佐須郷）、「たう」（豊崎、二位、三根郷）、「紅鶴」（伊奈郷）とあり、「与良、佐須両郷吟味帳」に、「とう鳥」：但し、とうの事、白さきにて白さきよりふとく、羽いろ白さきの物より赤身あり口はし赤し」とあります。

この的確な解説から考えて、トキがごく普通に見られる鳥であったことがうかがえます。
今年一月二十三日（日）、交流センターで行なわれた「ツシマヤマメコ野生復帰シンポジウム」において、対馬野生生物保護センターの水崎進介自然保護官による「ツシマヤマメコの野生復帰事業について」の報告に先だつて行なわれた二つの報告、「人とトキが共生する島」（高野宏一郎佐渡市長）と、「コウノトリと共に生きる」（中貝宗治豊岡市長）は、両市において先進地中国におけるトキの人工増殖に勝るとも劣らず、並々ならぬ忍耐と努力によって人工増殖、野生復帰が実現、十年まえにテレビで見た中国の田園風景トキと農夫の再現をわずか十年余で実現にこぎつけた実績を佐渡、豊岡両市の映像で見せられ、近い将来ツシマヤマメコの野生復帰をめざす対馬にとって、きわめて示唆に富み学ぶことの多いシンポジウムではなかつたかと考えています。（小松勝助）

金田城跡探訪会に

参加して

ただ性急な観
光開発になっ
てほしくない
なあと思った

秋の深まりを感じる十一月三日、対馬市文化財課企画の金田城跡探訪会に参加しました。金田城を訪ねるのは七年ぶりでした。平成十五年十一月対馬文化財協会の巡検でこのころ新たに発見された発掘が一段落した南門を見学して以来です。

実は金田城が国の特別史跡に指定された昭和五十七年、私は当時の美津島町の文化財保護審議委員でしたので、指定された金田城をどのように調査発掘整備をしていくか、町の文化財課の青写真づくりについて少し説明を受けていました。

城域面積だけでも二六ヘクタール、指定面積全体は約二四〇ヘクタールという大規模な史跡です。財政規模の小さな自治体にとつては、手に余りすぎる大事業のように思われました。

ことを思い出します。

一通りコースを回ってみて思ったことは、史跡全体があまり変わっていないということでした。一方で、学芸員の田中さんをはじめ担当者の方々の地道な調査と復元整備が着実に進んでいるなど感じました。

ただ、コースの旧軍道のあちらこちらに、イノシシが掘り繰り返したと思われる個所が見られ、イノシシの害がこんなところにもまで及んでいるのかと驚かされました。

ところで行程約二時間半、歩き始めたころは楽勝と思つていましたが、大吉戸神社を往復するあたりから足が棒のようになり肩で息をして喘いでいる私をみて、知り合いから大丈夫ですかと心配されました。日ごろの運動不足を思い知らされる一日でもありました。(杉原 敏)

釜山にあつた

日本人居留地

活動を、「西館」では外交活動をしていました。

日韓親善交流のシンボルとなつている朝鮮通信使の来日交渉の拠点となつていたのは釜山に設置された「草梁倭館」という日本人居留地です。一六七八年から一八七六年にかけて、対馬藩から派遣された男性約五百人がここに住み、日朝にまたがる外交案件の処理や貿易の手続き等を行つていました。館主以下代官(貿易担当官)、書記官、通詞などの役職者やその使用人だけでなく、小間物屋、仕立屋、酒屋などの商人、医学及び朝鮮語を学ぶ留学生もいました。

草梁倭館の敷地は約十萬坪(33ha)で、同時代の長崎の出島は約四千坪でしたから、その25倍に相当します。現在の釜山広域市南区南浦洞の龍頭山公園周辺になります。建物は龍頭山を中央に置き、東西に領域を分けて建てられ、「東館」では貿易

釜山に行ったことのある方ならわかると思いますが、釜山タワーの西にある国際市場が西館釜山観光ホテルから新しいロツテデパートの通りが東館の跡地で、その当時の路地や階段が現存しています。

「鎖国」と言われる江戸時代に、草梁倭館を舞台にして日本と朝鮮国との豊かな交流が繰り広げられていたのです。

一八一一年の最後の通信使から二百周年にあたる今年、釜山を訪れ、当時活躍していた対馬人を偲んでみてはいかがでしょうか。(文化財課・梅野菊次)

倭館絵図



(県立対馬歴史民俗資料館蔵)

文化財課だより

○「曲の盆踊り」東京で公開

八月に東京で開催される第十三回全国子ども民俗芸能大会に曲郷土芸能保存会の小学生、高校生など約四十名の参加が決まりました。なお、全国から七団体が出演します。

・期日 八月二十日

・場所 (財) 日本青年館

○埋蔵文化財シンポジウム

金田城跡、矢立山古墳群を中心にした対馬の古代遺跡を貴重な文化遺産として活用するために、シンポジウム、写真・遺物展示、現地見学会を開催します。

・期日 十月一日～二日

・場所 対馬市交流センター

金田城跡、矢立山古墳群

・主催 対馬市教育委員会

○第十八回朝鮮通信使ゆかりのまち全国交流会对馬大会

一八一一年の最後の通信使来日二百周年を記念する大会が対馬市で開催されます。シンポジウム、行列再現、ジエームス三木脚本の舞台劇などが予定されています。

・期日 十一月五日～六日

・場所 対馬市交流センター他

・主催 同実行委員会

○第一回古代山城サミット

対馬の金田城をはじめとする朝鮮式山城を文化遺産として現代に活かし、また歴史的資源として未来につなぐことを目的に開催されます。

・期日 十月七日～八日

・場所 熊本県菊池市・山鹿市

○「あつきの対馬」発刊

昭和十年代から三十年代の対馬の人々の暮らし、戦争体験、学校生活の様子などをイラストに描いた藤崎利明氏の作品集を発刊しました。

発行 対馬市教委文化財課

価格 一冊 九八〇円

販売場所 市内各地区公民館

対馬文化財通信 第4号

発行日 平成23年(2011)3月31日

編集 対馬市文化財保護審議会

発行者 対馬市教育委員会文化財課

長崎県対馬市美津島町雑知甲1287番地1

TEL 0920-54-2341

FAX 0920-54-4046

印刷 (資) 巖原印刷所 TEL 0920-52-0665

